三日市A遺跡

―ケアホーム清泉三日市増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

2011

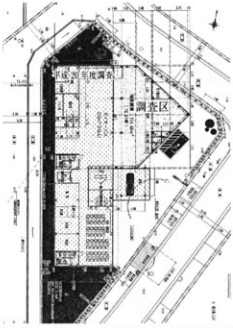
石川県野々市町教育委員会

例　　言

1　本書は、石川県石川郡野々市町字三日市町に存在する三日市A遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査原因は、ケアホーム清泉三日市の施設増築工事に伴うものである。
3　調査は、株式会社シンク・タンクからの依頼を受けて、野々市町教育委員会が実施した。
4　調査に係る費用は、株式会社シンク・タンクが負担した。
5　現地調査は平成21年10月1日～11月6日にかけて行い、出土品整理・及び報告書刊行は、平成22年4月19日～平成23年3月31日にかけて実施した。
6　現地調査及び報告書の執筆・編集は、田村昌宏（野々市町教育委員会文化振興課）が行った。
7　本書についての凡例は以下のとおりである。
（1）方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
（2）水平基準は海抜高であり、T．P．（東京湾平均海面標高）による。
（3）挿図の縮尺は図内に表示した。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
（4）土層図及び遺物色調の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。
8　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

第1章　調査の経過

平成20年、野々市町北西部土地区画整理地区49街区においてケアホーム施設の建設計画があがり、当時開発側の代表であった野々市町北西部土地区画整理組合と野々市町教育委員会（以下、町教委と呼称する。）との間で協議を行った結果、当該年度に町教委で現地調査を実施することで合意した。現地調査の完了後は施設の工事が着手されたが、平成21年7月に建設工事を担当する（株）シンク・タンクより施設建設予定地の一部を増築したいとの申し出があり、町教委とあらためて協議を行った。協議の結果、同年10月より町教委が現地調査を実施し、翌平成22年度に出土品整理・報告書を刊行することで合意した。平成21年7月16日、石川県教育委員会（以下、県教委と呼称する。）に埋蔵文化財包蔵地における土木工事の取り扱い手続きを行い、同年7月21日に県教委から承認をもらった。現地調査は同年10月1日より開始し、11月6日に完了した。出土品整理は、翌年の平成22年4月19日から始め、9月9日に完了した。その後、発掘調査報告書の刊行作業を実施し、平成23年3月31日に完成した。



第1図　ケアホーム施設増築計画図(S=1/800)

第2章　遺跡の位置と環境

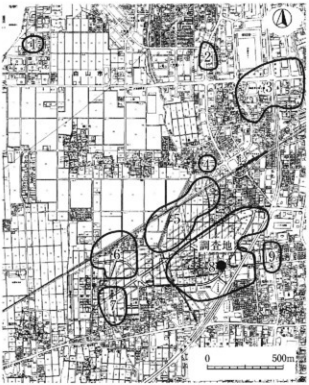
野々市町は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。町の大きさは南北約6.7km、東西4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。町域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部に位置する。

今の野々市町は平坦な地形が広がっているが、従前は手取川から派生する多くの小河川によって形成された微高地と微低地が混在する地形であった。稲作が伝わる弥生時代より、石川平野でも水田耕作が積極的に営まれるようになり、町域においても時代が下るとともに、凸凹の多い土地は少しずつ耕作地として生まれ変わって

第2図　野々市町の位置図

いった。明治時代以降、田区改正による耕地整理が各地で広がり、これ以降から、町は平坦な地形へと移っていった。ただし、現在は農地は激減し、商業施設や住宅地が次々と建てられ、町の姿は大きく変貌している。

三日市A遺跡が所在する町域北西部は、遺跡数が多い地域である。本遺跡から下流域は扇状地の扇端部にあたり、近年まで伏流水が噴出することから、古くは縄文時代から人々の営みが見られた。本遺跡より北方約1km離れたところには縄文時代後晩期の集落遺跡である御経塚遺跡（国指定史跡）が所在する。弥生時代に入ると稲作が伝播し、徐々に人々の営みも広がりを見せていく。本遺跡や隣接する二日市イシバチ遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、郷クボタ遺跡などからは、弥生時代後期を中心とした集落跡が点在するように見つかっている。これは、農耕社会が急速に広がったことにより、農耕地の確保が急務となったため、広範にわたってムラが形成したと考えられる。古墳時代には、本遺跡の北隣にある二日市イシバチ遺跡や、御経塚シンデン古墳群から、方墳を中心とした古墳跡が見つかっており、本遺跡を含む周辺地域を治めていた首長が存在したようである。古代に入ると、大規模な扇状地開発が進められ、各地一帯で遺跡を確認できるようになる。本調査区の南方では、古代北陸道の跡を検出した。古代北陸道は、畿内の都と北陸を結ぶ陸の幹線道路で、道路沿いには竪穴建物跡や掘立柱建物跡など、人々の集住した形跡も認められる。また、本遺跡北西約2kmには大和国東大寺が管轄した荘園管理施設跡である横江荘々家跡（国指定史跡）が所在する。中世になると、野々市町本町地区に大きな市場跡が出現する。守護富樫氏は、この地に守護所を置き城下町を形成していく。また、本遺跡や長池キタノハシ遺跡、二日市イシバチ遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡からは、当該時期の集落跡を確認している。江戸時代は、現在見ることができる集落の礎ができあがる。本調査区の西隣には三日市集落が所在し、この集落も江戸時代に成立したと思われる。



第3図　周辺の遺跡位置図（S=1/25000）

番号	遺跡名	種別	時代
1	横江荘々家跡	荘園	古代
2	御経塚シンデン古墳群	古墳	古墳
3	御経塚遺跡	集落	縄文　弥生　古墳　古代　中世
4	長池キタノハシ遺跡	集落	中世
5	二日市イシバチ遺跡	集落	縄文　弥生　中世
6	郷クボタ遺跡	集落	弥生　古代　中世
7	徳用クヤダ遺跡	集落	弥生　古代　中世
8	三日市A遺跡	集落	弥生　古代　中世
9	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落	弥生　古代　中世

第3章　調査の成果

第1節　層序

層序については、第5図の土坑1の土層断面図を基に説明していく。

1と2は灰色及び灰褐粘質土を基としており、土地区画整理事業以前まで行われていた水田耕作土である。3の褐灰粘質土及び4の灰褐粘質土は、近世から近代までの耕作土の層と推測する。8の暗灰褐色粘質土は遺物包含層にあたり、中世の遺構面にも該当する。これより下層の地山面は黄褐色粘質土で、一部の箇所で砂礫層が顔を出す。

第2節　遺構と遺物

本調査区は、西隣で実施した平成20年度調査時とは大きく異なり、顕著な遺構は多くみられなかった。その中でも、本調査区の北半分からは、ピットや土坑などの遺構が集中した。

調査区東端で土坑1を検出した。一辺約140cmの隅丸正方形の形状をするが、東側半分は調査区外となり、全容は明らかでない。地山面から約40cmの深さをもつが、第5図の土層断面図の層5も土坑の埋土の可能性があり、層5から測ると約60cmの深さとなる。遺物の出土はないが、周辺調査の状況などから中世の時期と推察される。

北半分で確認した遺構のほとんどは小穴（ピット）である。穴は円形・楕円形など形状は様々で、ほとんどは直径20～50cmの大きさである。深さも5～30cmとばらつきがある。小穴の中には、建物の柱穴に相当するような深いものも見つかっているが、並存する柱穴が認められなかったため、具体的な建物の抽出はしていない。しかし、周辺調査の遺構配置を再検討していけば、今後建物が発見できるかもしれない。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器・古代土師器、中世土師器、珠洲焼、打製石斧と多種にわたり、数量は35点であった。その中で実測ができたのは、土器・陶器7点と石製品1点であった。以下、各遺物の説明をおこなっていく。

1は縄文時代晩期中葉の中屋式深鉢の体部片である。LR縄文を施す。2も縄文時代晩期中葉の中屋式壷の破片である。入組三叉文の文様帯である。3は縄文時代晩期後葉の下野式前半の土器片である。外面には縦条痕の文様を見ることができる。4も縄文時代晩期後葉の下野式の土器底部片である。外底面には2－2－1の網代圧痕、体部外面には磨耗が著しいが縦条痕が見られる。色調、胎土などから3と同一個体の可能性をもつ。5は弥生時代前半の粗製土器である。外面の一部にミガキ調整の痕跡を確認することができる。6は須恵器坏の底部である。焼成がやや甘く軟質気味である。7は珠洲焼擂鉢の口縁部である。小片のため卸目文様は見ることができない。口縁端部には人為的に打ち欠いたとされる痕跡がある。時期は、吉岡編年Ⅳ期段階と思われる。8は、緑色凝灰岩を素材とする打製石斧である。基部は途中で折れている。刃部は全体に磨耗しており使用痕の跡と考えられる。長さ13.1cm、幅8.3cm、厚さ2.7cm、重量300gである。

なお、図示はしていないが古代土師器の甕、内外面に赤彩を施す椀の破片が認められた。

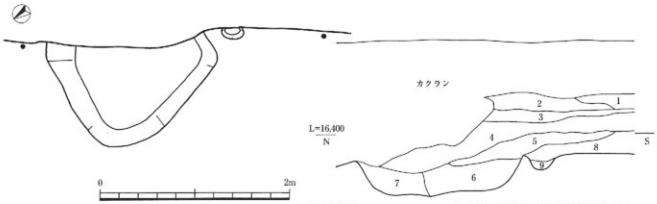
第4章　まとめ

縄文時代晩期～弥生時代前半の時期では、土器や使用痕の認められる打製石斧が発見された。但し、調査区内には当該時期の主要な遺構は見られず、遺物の数量も少ないことから、当該時期における本区一帯は集落跡ではなく、一時期に駐留してこの地付近で根茎類の食物採取などを行っていたと推測する。

平成20年度に西隣で実施した発掘調査では、14世紀代を中心とした集落跡が見つかった。この調査区では、掘立柱建物や竪穴状遺構跡など集中したことから、集落の中枢部にあたると想定した。今回の調査区は、その調査地の隣接地にあたることから、同様な遺構密度が想定されたが、実際には主要な遺構・遺物の発見はなかった。以上から、中世の集落は平成20年度調査区より西方に展開し、本調査区は集落の外縁地、もしくは耕作地にあたると考えられる。

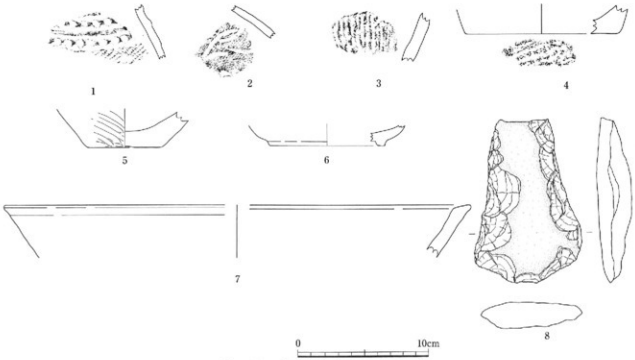
参考文献
安　英樹　1999　「石鍬雑考」『石川県考古資料調査・集成事業報告書　農工具』　石川考古学研究会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

第4図　遺構平面図（S=1/100）



1. 灰色粘質土
2. 灰色ブロック土混り灰褐粘質土
3. 褐灰粘質土
4. 暗灰褐ブロック土混り灰褐粘質土
5. 黄褐、灰褐ブロック土混り暗灰褐粘質土
6. 黄褐、暗灰褐ブロック土混り灰褐粘質土
7. 5層に似る、5層よりも黄褐ブロック土多く含む
8. 灰褐ブロック土混り暗灰褐粘質土
9. 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土

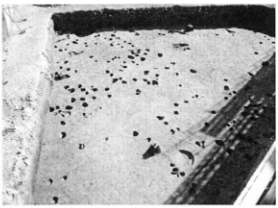
第5図　土坑1遺構実測図（S=1/40）



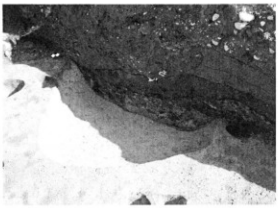
第6図　出土遺物実測図（S=1/3）

土器観察表

番号	グリッド	種類	口径	器高	底径	色調（内）	調整（内）	残存率	備考	実測番号
	遺構	器種	(cm)	(cm)	(cm)	色調（外）	調整（外）			
1	D 10	縄文土器				にぶい黄橙		小片	精製	6
	包含層	深鉢				にぶい黄橙				
2	C 11	縄文土器				にぶい黄橙		小片	精製	3
	包含層	鉢				にぶい褐				
3	C 11	縄文土器				にぶい橙		小片	縄条痕	4
	包含層					橙				
4	C 11	縄文土器			(12.0)	にぶい黄橙	ナデ	1/8 強	精製	2
	包含層					明褐			調代圧痕	
5	C 10	弥生土器		(30.1)	30.0	にぶい黄褐	ナデ	底部完形	粗製	1
	地山直上					にぶい黄褐	ミガキ			
6	C 11	須恵器			9.0	灰白	ナデ	全体 1/7		5
	包含層	杯				浅黄橙	ナデ			
7	D 9	珠洲焼	(36.7)			灰白	ナデ	小片		7
	包含層	擂鉢				褐灰	ナデ			

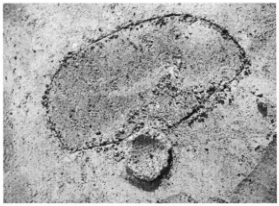


全景（西から）

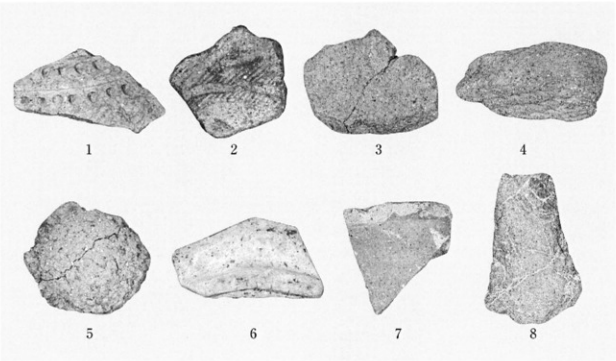


土坑１（西から）

ピット群（東から）



土器５出土状況（北から）



報告書抄録

ふ り が な	みっかいちAいせき
書　　名	三日市A遺跡
副　書　名	ケアホーム清泉三日市増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	田村　昌宏
編 集 機 関	野々市町教育委員会
所　在　地	〒921-8510　石川県石川郡野々市町字三納18街区1番　TEL 076-227-6122
発 行 年 月 日	西暦　2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
みっかいち 三日市A遺跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 ののいちまち 野々市町 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32′ 10″	136° 35′ 46″	20101001 ～ 20101106	237㎡	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三日市A遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 中世		土坑、ピット		縄文土器、弥生土器、 須恵器、珠洲焼、 打製石斧		

要　約	縄文時代晩期から弥生時代前半の土器片及び打製石斧を確認した。当該時期の遺構は見られず、また遺物の出土量などから、本調査区では、食料などの採取を目的とした、短期間の活動拠点地であったと考えられる。 平成20年度に本調査区の隣接地で発掘調査を実施したところ、14世紀を中心とした集落跡を発見した。本調査区では、当該時期における顕著な遺構・遺物は確認できなかったことから、集落縁辺部もしくは耕作地と推定される。

三日市A遺跡

ケアホーム清泉三日市増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　2011年3月31日
発行者　野々市町教育委員会
〒921-8510
石川県石川郡野々市町字三納18街区1
電話　076-227-6122
bunka@town.nonoichi.lg.jp
印　刷　高桑美術印刷株式会社
〒921-8822
石川県石川郡野々市町矢作3-18